

第59回 HMC オープンセミナー 場所を共に耕す (Cultivating a Place Together) —ホーム／ミンダナオを知るための旅

- 日 時：2022年3月25日（金）17:30 - 19:30
- 場 所：Zoom オンライン開催
- 報告者：
 - 青山 和佳：東京大学東洋文化研究所・教授（東南アジア地域研究）
 - 岸 健太：秋田公立美術大学大学院複合芸術研究科・教授、建築家
- 報告構成：
 - 第1部 プロジェクト・ドキュメンテーション（青山和佳）
 - 第2部 ホームを旅する（岸健太+青山和佳）
 〈通訳〉 樺山智子、辻美穂

コンセプト：

コロナによりフィリピン・ダバオ市の調査地（少数民族集落）に通えなくなったフィールドワーカーの「わたし」は、新たに通える場所を創出してみることにした。そこは、「わたし」にとってミンダナオをこれまでとは異なる側面から知るための場所であってほしいと願い、現地に暮らす若手知識人3名と臨床心理学者1名とともに毎月1回のオンライン交流を始めた。そのテーマは、各自にとってホームであるはずのミンダナオを知ることであった。本報告の目的は、このプロジェクトの経緯と途中経過をドキュメンテーションし、その意味をアーティストで建築家の岸健太氏と討論することで確認することである。



第1部 プロジェクト・ドキュメンテーション

青山和佳

第1章 旅の始まり

1. はじめに

あいさつ

初めまして、東京大学東洋文化研究所の青山和佳です。本日はお集まりいただき、ありがとうございます。すこし自己紹介させていただきます。専門は、東南アジア地域研究です。1990年代末から20年以上に渡り、南部フィリピン、ミンダナオ島のダバオ市に暮らす少数民族サマ・ディラウトの人びととともに生活変容について考えてまいりました (Aoyama 2020)。また最近では、東南アジアの歴史を教えることもあり、その関係で仲間とともにアンソニー・リードの大著の翻訳を終えたばかりです。『世界史のなかの東南アジア：歴史を変える交差路』という上下巻で名古屋大学出版会から刊行されております。ぜひ手にとっていただければ幸いです。

本セミナーの概要

さて、本日は、「場所を共に耕す:ホーム／ミンダナオを知るためのひとつの旅」という題目でお話しさせていただきます。昨年の3月、フィールドワーカーのわたしは、コロナによりフィリピン・ダバオ市の調査地 (少数民族集落) に通えなくなったことを契機に、新たに通える場所を創出してみることにしました。そこは、自分自身にとってダバオ／ミンダナオをこれまでとは異なる側面から知るための場所であってほしいと願い、現地に暮らす若手知識人3名と臨床心理学者1名とともに毎月1回のオンライン交流を始めたのです。

そのテーマは、各自にとってホームであるはずのミンダナオを知ることでした。ミンダナオはフィリピンの南部の一地域であり、ミンダナオ島とスル諸島からなります。ミンダナオの最大の都市がダバオ市です。ダバオ市は、歴史的には日本人を含め多様な集団が移民して形成された社会であること、現代的には現・フィリピン大統領のロドリゴ・ドゥテルテが長年市長を務めたことなどで知られています。

最初にお断りしておきたいのですが、本件は相互作用の過程を重視したプロ

プロジェクトのドキュメンテーションです。いいかえれば、成果そのものよりも実践のプロセスにおける意味の生成を重視するということです。パンデミックになり、オンライン研究会の機会もふえました。しかし、それらはよくもわるくも目的が限定的で、直線的なタイムラインで進行するものが多く、脇目をふったり、寄り道したり、雑談したりすることは難しいのではないのでしょうか。本件は、目的的な研究会ではなく、本来それと相互補完的に存在しているはずのサロンのな場を作り出そうとした試みでもあります。そのため、何かを成し遂げたと一言で表現するのは難しく、皆さまにどこまで説明できるのか心もとありません。しかし同時に、皆さまにお話しして共有することで、プロジェクトに公共性を持たせることは、アートという観点からも倫理という観点からも重要であると考えます。

本報告の目的は、第一部においてこのプロジェクトの経緯と途中経過をドキュメンテーションし、第二部では、その意味を秋田公立美術大学教授の岸健太さんと討論することです。岸さんは、このプロジェクトにアート性を持たせる上で助言して下さっただけではなく、スラバヤや秋田を拠点に実施した芸術活動やそれらに基づくご論考からわたしが常に刺激と励ましをいただいている建築家でありアーティストです。皆さまには、第一部をお聴きいただいたうえで、第二部における討論ではぜひ質問などを通してご参加いただけたらと存じます。全体として、ごこちなく、わかりにくい報告となりそうで、皆さまにはご負担をおかけいたしますが、どうかよろしくお願ひいたします。

2. 経緯

まず、本プロジェクト成立までの経緯についてお話しいたします。

Go Beng Lanの励まし

このプロジェクトの大きなヒントになったのが、友人のGo Beng Lanからの助言でした。彼女はマレーシア出身で、日本、オーストラリア、アメリカで教育を受け、研究し、シンガポール国立大学のAsia Research Instituteで東南アジア地域研究を教え、アジアにおける新たな知識生産の方法を探究してきた人類学者です。彼女が2011年に編集した*Dicentring and Diversifying Southeast Asian Studies: Perspectives from the Region*（東南アジア研究を脱中心化、多様化する：東南アジア地域からの展望）は、欧米を中心とする知識生産の方法を相対化しようとした試みでした。具体的には、世代の異なる東南アジア出身の東南アジア地域研究者の自伝を収集し、その内容を比較分析しています。その後もGo Beng

Lanは、アジアの研究仲間たちと連帯し、知の脱植民地化を模索することを続け、2020年にその集大成として“Inter-Asia as Method and Radical Politics”など2本の論文を発表しています。彼女がわたしの本を読み、手紙をくれました。あなた自身も無意識ながら知の脱植民地化に貢献していると思う、あなたも現地知識人と交流してみたらどうか、と助言してくれたのです。

アテネオ国際化ミンダナオ・オフィスを通じての募集

Go Beng Lanの論考は国境を跨いで展開するスケールの大きいものでした。これに対して、わたしはまず自分がいまでできることとして、フィリピンのダバオ市、それを含むミンダナオをサイトとして設定し、現地に暮らす知識人との交流をしたいと思いますと考えました。幸いにも2020年12月にHMCの公募研究Aに採択していただいたので、2021年3月、ダバオ市にあるイエズス会系の大学であるAteneo de Davao University (ADDU)のAteneo Internationalization for Mindanao Office (AIM)を通じて、参加者を募ることにしました。東大とフィリピンの地方大学との交流はめずらしく、交流の多様性を図る上でよい考えだったと思っております。

わたしはキリスト教徒の若手知識人を探しました。あえてキリスト教徒としたのは、日本のフィリピン研究には豊かな蓄積があるものの相対的にミンダナオの研究は少ないだけでなく、日系人研究、ムスリム研究、少数民族研究の分野に集中しているという特徴があり、一方で実際にはそこに存在し生活しているキリスト教徒にはあまり目が向けてこられなかったからです。また今回は、わたしが現地滞在中にすでに交流のあった、エスタブリッシュされたシニア研究者ではなく、まだ出会ったことのない、スタートアップ段階の若手研究者と交流してみたいと考えました。

テーマ

交流のテーマは「ホームを知る、ミンダナオを知る」といたしました。ミンダナオ出身でミンダナオにおいて創作活動を行う、あるいはボランティアや調査研究を行う若手研究者にとってミンダナオがホームであるとするれば、彼らにとってミンダナオとは何であるのか。また、ミンダナオはわたしにとっても長年通ってきた第二の故郷でもあります。実のところミンダナオのことをわたしはよく知らないのです。わたしたちは、一見親しみのある場所を実際にはよく知らないのではないのでしょうか。そのような場所にあらためてアクセスするとき、そこをホームとする他者を經由しあうという試みはどうだろうか、思い浮かびました。自己を知るためには他者が必要であるように、ホームを知るためにも他者との分

かち合いが必要であろうと考えたからです。

そこにアート性をもたせようと思ったのは、そのプロセスに「遊び」をもたせ、真っ直ぐに進まないようにするためでした。参加者はいずれも優秀な研究者ですので、ある意味、目標を提示すればそれを達成することは得意です。しかし、それではグループでプロジェクトを行う意味がありません。他者を受け入れる余裕をもたせるためにも、「遊び」はぜひ必要な要素でした。

3. プラットフォームを立ち上げる

つぎに、プロジェクトのフォーマットを説明したいと思います。逆説的ですが、「遊ぶ」、つまり参加者が自由に考えや感情を表現するためには一定の枠組みが必要です。そう思ったものの、わたしはアーティストではありませんし、通常の研究会以外の場づくりはしたことがなかったので非常にとまどいました。そこで、本日お越しいただいている岸健太さんに助けていただきました。

プロジェクト・タイトルの由来

そもそも「場所を共に耕す」(Cultivating a Place Together) というこのプロジェクトの名称自体、岸健太さんに多くを負っています。岸さんから教えていただいたフランスの芸術家ソフィ・カル「一点を育む」(Cultivating a Spot) という小作品が大好きでした。岸さんがご論考のなかで紹介しているように、この作品は、作家のポール・オースターが「ゴサム・ハンドブック S.C.のためのニューヨーク暮らしの改善法 (彼女に頼まれたので……)」というエッセイのなかで示した、ソフィ・カルに宛てた都市居住の心得4点のうちの最後のものです。その内容はつぎのようなものです。

「毎日同じ時間に自分の地点に行くこと。1時間のあいだ、その地点に起きることをすべて観察し、その前を通り過ぎたりそこで立ち止まったり何かしたりする人すべての動きを追うこと。メモを取り、写真を撮ること。こうした日々の観察を記録にまとめ、人間について、もしくはその場所について、あるいはあなた自身についてなにか学べるか見てみる。そこに来る人たちに微笑みかけること。可能な限り、声もかけること。言うことが思いつかなかったら、まずは天気の話」(オースター 1994, 292, 岸 2022, 11 所引)

軒先の庭を耕すように

ソフィ・カルがニューヨークで一点を耕したのにたいして、わたしの場合はコロナの状況にあってオンライン空間に一点を創出せざるをえないように思われました。わたしがイメージしたのは、かつて祖父がアパートの軒先に作っていた菜園です。大切なことは、そこにいつもその菜園＝庭があり、ほぼ決まったメンバー＝常連が有形無形のなにかをもちより、交換し、会話し、別れ、それぞれの時間をそれぞれにすごし、そしてまた戻ってくるというポリフォニックで持続的な時間の流れがあったことです。これも岸さんの論考に刺激を受けての表現になりますが、祖父はいわばその庭の庭師（岸 2022, 38）であり、ある種の触媒でした。わたしも祖父のように、このプロジェクトでは参加者が何かを創ったり語ったりするためのプラットフォームを立ち上げ、そこに参加しつつ見守る庭師でありたいと考えるようになりました。

フォーマット

このプロジェクトの大きな枠組みは、毎月1回グループセッションを昨年4月から半年、合計6回続けたうえで、パーソナルインタビューをそれぞれ3回行うというものでした。パーソナルインタビューは、各参加者のライフストーリーを聴くものです。グループセッションは、パーソナルインタビューに備えてのアイスブレイキングという位置づけでした。しかし、アイスブレイキングといいながらも、それ自体に意味がある、大変面白い経験になったと思います。その遊びの要素をここで十分にお伝えできないことがとても残念です。

アイスブレイキングのフォーマットは1回90分で3部構成でした。最初に、各自が制作した短い動画で身の回りのことを報告します。セルフジャーナリズム的なものです。つぎに、地域の歴史に関する専門書を朗読します。学術書を声にだして読み合いです。最後に、参加者の提案によって想像力が膨らむような何らかのアーティスティックな活動をしました。その具体的内容については、のちほど少しですが紹介いたします。

このほか、海外在住のミンダナオ研究者、フィリピン研究者によるスペシャル・トークを合計4回開催しました。なお、最終成果物としては、パーソナルインタビューをまとめたブックレットを今年の9月に刊行する予定です。

第2章 旅の仲間

このプロジェクトには、4人の素晴らしい現地在住の知識人に参加していただいています。一人目はKarlo Antonio Galay Davidさん、アーティストであり、作家であり、故郷キダパワンを研究する歴史家でもあります。二人目は、Kristine Cordenilloさん、文化人類学を学ぶとともにコミュニティのボランティア活動に従事してきました。三人目は、Christian Pasionさん、開発や環境問題に関心をもつ経済学者です。この3人の参加者に加え、わたしたちをおおいに支えてくださっているのが、コンサルタントのNelly Limbadan博士です。彼女は臨床心理学者としてグループセッションにおける心理的安全性を保障するとともに、パーソナルインタビューのインタビュアーを務めてくださいました。ここで参加者からのメッセージをご覧いただきたいと思います。

Karlo Antonio Galay David:

Good evening, I am Karlo Antonio Galay David, a local historian and researcher. I am currently in Kidapawan City in North Cotabato, one of the southern provinces of the Philippines. In front of me is a unique dish, which is called Sinallag no Kulibpos; you can zoom in. This is a dish made of roasted dragonfly nymphs. It is a unique dish belonging to the cuisine of the indigenous Obo Monuvu people who have called this place their home since time immemorial. And I am currently at Kidapawan to help document this and other such dishes. I have been a member of – a participant of project DEAI for over a year now and it has been a pleasure to be a part of it because I get to share little unique tidbits about my town with Prof. Waka and with my fellow participants and automatically the rest of the world.

Mae Kristine B. Cordenillo:

Maayong adlaw! Konnichiwa! Good day to everyone who is watching this in Japan. I am honored to join you virtually in this gathering. My name is Mae Kristine B. Cordenillo and you can also call me Tin. I am an anthropology researcher now based in Cagayan de Oro City. I was born and raised in Davao City, and I am currently finishing my thesis for my master's degree in anthropology at the Ateneo De Davao University. Prior to the pandemic, I was fortunate enough to visit several places in Mindanao, Philippines, for research

and volunteering. These projects enabled me to learn and experience how the locals, especially the indigenous peoples, in these areas live. I had a glimpse into their way of life, their triumphs, challenges, and dreams.

The stories that these people shared did not only become a part of the reports that were submitted after each project. Their stories became a part of me, and in a way, their dreams also became mine. I realized that we all dream of a peaceful Mindanao no matter the location, ethnolinguistic group, gender, age, etc. We dream of a Mindanao that will allow us to pursue our passion and goals in life, a Mindanao that our children and children's children can be proud of. Although the pandemic has limited some research activities, project DEAI, which is cultivating a place together, ignited the same passion again. Meeting Prof. Waka, Prof. Nelly, Sir Karlo, and Sir Christian inspired me to continue achieving these cumulative dreams from the field stories. The monthly meetings established a bond and allowed us to share our passion and the things we are working on for the betterment of our society. We also learned a lot about Mindanao through our book club and from the talks organized by Prof. Waka. I am deeply honored and very grateful to be a part of this project. Thank you. *Daghang salamat! Arigatou gozaimasu!*

Christian C. Pasion:

Good afternoon everyone. It is an honor to be invited as one of the presenters in this open seminar hosted by the Humanities Center of the University of Tokyo. I am incredibly grateful to Dr. Waka Aoyama of the Institute for Advanced Studies in Asia for the opportunity to be a part of this project. I am Christian C. Pasion. I currently work as an instructor and researcher in the Economics Department of Ateneo de Davao University, based in Davao City, Philippines. When I was invited to be a part of this project, I was very excited and hopeful. I am hopeful because this might be the beginning of more collaboration between the University of Tokyo and the Ateneo de Davao University. In the last 9 months, this project has served as a platform for sharing ideas among senior and young scholars with different academic backgrounds about various Mindanao issues.

The numerous sessions centered on various topics have proved that our idea of a home is the same despite our differences; that home is Mindanao. This project has also encouraged me to venture out of my comfort zone and explore other exciting research topics, such as urban poverty and self-rated poverty. Overall, I can say that before this project started, my knowledge about Mindanao was only a drop in the bucket. I learned many things about its culture, arts, history, and psychology because of this project. My brilliant colleagues graciously shared their personal history in ways that I could never have imagined. These experiences made me realize that there are still many topics that need to be explored about the region. Thank you again, Prof. Waka and the Humanities Center of the University of Tokyo, for this precious opportunity.

Nelly Limbadan:

A pleasant day, everyone. I am Nelly Limbadan, a clinical psychologist. At the moment, I am also the Assistant Dean of the social sciences cluster of the School of Arts and Sciences of the Ateneo de Davao University. For this project, I am a consultant providing the psychological perspective throughout the entire journey of our scholars and I thank Prof. Waka Aoyama for this opportunity to be a part of this project. Now, talking about transformations of our scholars, let us talk about Kristine first. At the start, she had questions, she was slightly confused, “What am I doing here? What is my purpose?” But later on, she realized that she is bringing her experience as she narrates them as these experiences provide her experience in becoming a scholar from Mindanao in anthropology.

And then we have Karlo; from the very beginning, I found him to be very vocal, expressive, and straightforward. As a writer, he captures the voice of the people from Mindanao, of Mindanao itself, and it is a very heartwarming that – I am proud that someone from Mindanao is writing about Mindanao. And then we have Christian, who is very passionate about how to educate people, how to use education to get out from poverty and he continues to do that up to this time. Now, what does this mean to me as a psychologist? I am very glad that I am a part of this project because it is one of a kind. It is not just about getting the stories and narratives of these scholars and then turning them into some-

thing usable for everybody to refer to in the future, but this is also making sure that in this experience, they are psychologically safe, that their thoughts, that their narratives are respected, and I am happy to be part of this. Thank you.

第3章 旅の途上で

1. プロジェクトの実際

続いて、プロジェクトの実際についてお話しします。

Project DEAI

このプロジェクトにはニックネームがあります。これはプロジェクト開始時点で、参加者に私的の所有感、つまりオーナーシップの感覚をもってもらうために考えたことです。フィリピンでは、本名ではなくニックネームで呼び合う習慣があります。それにちなんで、プロジェクトをニックネームで呼ぶことにしました。Karloが提案してくれたのが、Project DEAIでした。DEAIにはふたつの意味が込められています。ひとつは、日本語の「出会い」です。もうひとつは、ビサヤ語で驚きを表す間投詞“diay”です。最初はパーソナル・インタビューだけかと思っていたのに、グループセッションが何度もなされ、一定の時間を共に旅するとわかったときの参加者の驚きを表しています。出会って旅をするというコンセプトがこうしてわたしたちのあいだで共有されました。

ビサヤ語で語り合う

もうひとつ重要なことは言語のことです。グループセッション、パーソナルインタビューを通じて、わたしたちが使った主な言語は、ビサヤ語でした。ビサヤ語はフィリピンにおいてビサヤ諸島からミンダナオにかけて広く使われている地域共通語です。ダバオ市でもかなり多くの人たちがこれを母語としています。わたし自身もダバオ市に留学し、自然に習得をめざしたのはビサヤ語でした。フィリピンでは、政治学者の日下渉さんが論じているように二重公共圏というものがある。想定され、英語を使うミドルクラスとタガログ語のようなヴァナキュラーを使う貧困層が社会的に分断された形で共存しているとされます（日下 2013）。

日下さんの研究は優れていますが、マニラ首都圏が舞台となっているため、ミンダナオの現実とはずれているところもあるとわたしは考えています。また、それは公共圏を対象としているので、親密圏での母語の役割には関心をむけていま

せん。本プロジェクトの参加者は英語で教育を受けていますし、国語であるフィリピーノ語（タガログ語）も達者ですけれど、このプロジェクトでは基本的にはビサヤ語で語り合いました。ことばがわたしたちの世界をつくるとすれば、ビサヤ語はわたしたちがホーム／ミンダナオを知ろうとするときに第一の鍵となります。そういう意味でも、このプロジェクトの最終成果物であるブックレットは、ビサヤ語、日本語、英語の3言語併記で制作するつもりでおります。

互いにケアする

このプロジェクトのもうひとつの特徴は、臨床心理学者でセラピストでもあるDr. Nelly（親しみを込めてこう呼びます）にコンサルタントとして参加していただいたことです。ひとつは、オンラインという閉鎖的空間において参加者同士が親密な交流をする場合に互いの存在を尊重し傷つけないようにするために、専門家にそこに居てもらいたかったからです。もうひとつは、ファシリテーターであるわたし自身に自閉スペクトラム症という障害があるため、参加者の意図や感情を汲み取れなかったり、過度の緊張から緘黙になってしまったりした場合に、マネジメント的な、あるいはサポート的な介入をしてもらうためでした。実際、Dr. Nellyの存在は大きな励ましでした。とくに、参加者間のコミュニケーションがうまくいかなかったときでも、よりよい形でつぎにつなげていけるよう手伝っていただけただけで大きな意味がありました。

2. それぞれの「ホーム／ミンダナオ」を分かち合う

そのように心理的安全性が保障された場において、参加者は3人3様にその「ホーム／ミンダナオ」に関する考えや感情をシェアしてくれました。時間の都合でほんの少しとなりますが、アイスブレイキング・セッションの内容から、具体的に紹介しようと思います。

アーティストの世界（Karlo）より

たとえば、Karloはなんと言っても作家であり、アーティストでありました。わたしがとくに印象に残っているのは、6月のセッションで現地のアーティストの作品を紹介してくれたときのことです。1枚は彼の故郷キダパワンの作家によるドリアンの花の絵でした。ドリアンといえばダバオ名産のフルーツとして有名ですが、どれだけの人がその花を見たことがあるのでしょうか。また、わたしたち5人のだれもがよく知っているダバオ市のストリートを描いた高校生の作品も見せて

くれました。どちらの作品も、よく知っている物や場所のはずなのに、初めて出会うような感覚を覚えました。なるほど、よく知っている物や場所だからこそ、それらの絵に対して自己がもつイメージを投影し、それと作家の表現した世界の重なりとずれに感情を揺すぶられるものです。Karloという媒介者によって、わたしたちは日常的風景の異化を共有することができました。

共苦する人の世界 (Kristine) より

つぎに、Kristineは、わたしにとっては「(他者と) 共苦する人」でした。とても印象的だったのは、彼女の履歴書において、職歴とボランティア歴がまったくパラレルに表記されていたことです。実際、4月の自己紹介の動画では、自分自身の紹介であるはずなのに、むしろDavao del Norte州(北ダバオ州)における先住民Ata-Manoboについての語りになっていました。そこでは、Ata-Manoboの再定住地が中心地から離れていること、かつてはアバカ(マニラ麻)が栽培されていたけれども今はバナナ・プランテーションであること、日本占領期の話が現在もなされること、ベーシック・サービスへのアクセスが困難であること、武力紛争や貧困に苦しんでいること、先住地も利用できず文化喪失が進んでしまっていることなどが、彼女自身の言葉で語りなおされていたのです。そして、最後に「にもかかわらず」人びとは将来を向いて生きている、と締めくくられていることが印象的でした。

リサーチャーの世界 (Christian) より

クリスチャンは、リサーチャーでありサイエンティストであり、そうであることを通じて貧困に苦しむ人びととともに生活の質を改善していこうと努力する人です。とくに印象に残っているのは、6月のセッションで、「家計貯蓄の現状分析」という発表をしてくれたことです。経済学者らしく数字やグラフを駆使して、農村部における貯蓄率が上昇していること、それには農村部におけるマイクロファイナンスが貢献している可能性などを説明してくれました。また、ぐんぐん伸びているように見えるダバオの成長が、実際には不動産投資に牽引されており製造業主導ではないこと、そのため雇用の創出が弱く、貧困問題の解消に必ずしも結びついていないこと、そしてそれにたいする政策提言を教えてくださいました。彼の話に耳を傾けながら、わたしたちは、机上の空論を現実に当てはめようとするのではなく、現場に足場を置いた科学者がミンダナオで求められているという現実を思い知らされたのでした。

3. 出会い、歩きめぐる

第一部の最後として、ややランダムになりますが、わたしがいま考えていること、感じていることをお伝えしたいと思います。

現地で暮らしながら研究すること

1年たらずの、しかしながら豊かな交流を行ったこのプロジェクトを通じて、わたしが気づいたことを3つ挙げておきます。第一に、参加者の創作や研究のテーマがどれも現地のリアリティと強く関係しているということです。そこには肌感覚とよべるような何かがあります。それはグローバルサーキュレーションのなかで生み出される知識とは異なる、それ固有の価値をもつものです。第二に、参加者それぞれが、現地の人びとのより良き暮らしに自らの知識を役立てていきたいという意思を持っていることです。言い換えれば、実践志向が強いということです。第三に、参加者は同時に、より多くの人びとに彼らのホーム／ミンダナオについて知ってほしい、発信していきたいと考えていることです。互いについて知るということは、当たり前のようなのですが、共に生きていくうえでの大前提です。知ってもらうためには、発信していくこと、それを受信してもらうことが大切です。そういう意味で、本日このような機会をいただいたことは本当にありがたいのです。

「歴史」とつながりなおすこと

もうひとつ言及しておきたいのは、参加者が未来に向けてより豊かな想像力を育めるように、本プロジェクトでは地域の歴史を学ぶことを重視したということです。そのために、ミンダナオ出身の政治学者であり、ミンダナオの歴史にも詳しく、現在はハワイ大学にいらっしゃる Patricio Abinales 先生に水先案内人をお願いしました。フィリピンという国民国家において「周縁」とされてきたミンダナオ、その一方でグローバル経済に直結して発展してきたミンダナオ。その歴史を学ぶと何が見えてくるのか。さらには、その歴史においてこれまでは描かれなかった人びと、マイノリティ化された人びと、あるいは人間以外の存在にも目をこらすと何が見えてくるのか。わたしたち自身の存在をどのように歴史的にとらえなおすのか。そういう問いを一緒に考える時間を持たたと信じております。

また、Abinales 先生の励ましもあり、本プロジェクトと並行して、Mindanao Book Club Tokyo という読書会もできました。毎週1回、1時間、日本とアメリカをベースにする3人の若手研究者とわたしでミンダナオの歴史の勉強をしてお

ります。この読書クラブは、本プロジェクトのグループとときどき交流しております。ミンダナオに在住する研究者と、ミンダナオに関心をもち続けながら外国に在住する研究者との交流は、各自が自らの学問的ポジションを確認する上で役に立っていると思います。また、パンデミック下にあっては、学問を通じてつながっているという定期的な確認ができるだけでも、互いの励ましになってきたのではないのでしょうか。

再考—出会うということ—

第一部の結びにはいります。先にお話ししたように、このプロジェクトのニックネームは、Project DEAIです。「出合い」ということをあらためて考えてみると、それは家を出て道において我と汝が出会うことを指しています。わたしは軒先に庭をつくったつもりでしたが、それは同時に「家」[ホーム]を出てどこか別の場所に出かけていくことでもあったのです(張 2020)。この場合、わたしのホームとはどこだったのでしょうか。わたしはこのプロジェクトで参加者と互いに内面をシェアする旅をしてきました。そのような旅を通じて、わたしのホームとは、ダバオ市のなかでも、サマ・ディラウトの人びととすぐす、あの海辺の集落のことであったのか、と気づかされました。ホームから離れてみて初めて、そこが紛れもなくホームであること、そこが自分にとってどんなにかけがえのない場所であるのか、あらためて実感できたのです。

繰り返しになりますが、パンデミックを契機にホームを離れざるを得なかったわたしは、セラピストのDr. Nellyに見守られながら、Karlo, Kristine, Christianに出会うことができました。わたしたちは小さな庭をともに育む持続的なプロセスをつうじて、互いの一部を互いに取り入れ合ってきたように思います。正直に申し上げて、そうすることを通じて、いったい何が達成されたのか、ということは、わたし自身もまだよくわかっておりません。ただ、わたしたちは、かすかなものであれ自己変容をきざすととともに、ミンダナオというホームをあらためて知ることの一步を踏み出せたのではないかと信じたいです。以上、本プロジェクトの経緯、形式、実際について、駆け足ですが、共有させていただきました。第一部をこれで終わります。お聴きくださり、ありがとうございました。

第2部 ここから

○岸 こちらのセミナーへのご招待をいただきありがとうございます。

青山先生のご報告、大変興味深く刺激的なものとして受け止めております。報告の中でも出てきましたが、パンデミックで、多くの地域研究者が、移動も現地での活動もできないという状況に置かれていますよね。身近にもグローバルにも距離（ディスタンス）が生まれているなかでこそ、共につくることや共同性を通して、それが有機的に育っていった場がつくられるという試みは、非常に力強い活動だなと思って伺っていました。

先生のフィリピンでの活動は、共同性を重視したかたちで取り組まれていますがお話を伺っていると、今回のセミナーに対してもかなり共同性を期待されているように思いました。そのための仕掛けとして、旅、庭、ホームという異なる分野で、あらゆる人々が一生活者として自身の経験に引き寄せながら考えていけるようなフレームをご自身の活動の中にご準備されているということですね。今日のHMCセミナーも、タイトルにありますように、「共に耕される場」として考えられているのかなと思います。

今フレームとして挙げた、旅、庭、ホームですが、報告にあったように、それぞれ違うように見えて実は全部プロセスと関わるものでもありますよね。これはとても面白いと思います。旅がプロセスであるということは分かりやすいと思いますが、庭もそうですね。時間をかけないと、庭というものはできてこないわけです。またホームも、ある一定の時間や経験を経ることで、そこがホームであるということがその人の中に刻まれていくものです。

青山先生がお話の最後のほうで、何を達成したのか、そこにどういう意味があるのか、まだ見出されていないかもしれないとおっしゃっていたところが、実は大事ですね。活動をひとつの言葉で定義してしまうのではなくて、旅、庭、ホームという複数の言葉で伝えようとしているところが非常に興味深いですし、とても面白い方法だと思います。

ご報告の冒頭にありましたように、今回のドキュメンテーションの意味は何なのかを探るために、私にもその場に参加してほしいということで、私も皆さんのさまざまなお話を伺うことができました。このような開かれた議論をもう少し根源的な部分でしていけるようなフレーミングのされ方、フレームの重ね方があり得るのではないかと思います。「よりよく生きる」という言葉も出てきましたが、このドキュメンテーション自体が、研究者が行う研究のためだけではなくて、一人ひとりの個人が今のクライシスの中で—いつまで続くか分かりませんが—生き

ていくための方法すら提示し発見していくようなディスカッションの場になっていくと面白いなと思って伺っていました。

青山先生ともいろいろご相談させていただいた私の論考¹—今日もお話に出てきましたが—、それも同じような視点で、一番大きなトピックにしていたのが、今の時代、特にパンデミック以降、人は「生きる」ということをどのようなものとして理解するべきかということについてです。つまり、今は生物学的なサバイバルだけではなく文化的なサバイバルもまた人にとり欠かせないものであることに思いを巡らせるべき時代でもあるのではないかと考えています。パンデミックのなかで制限されたり禁じられたりしているさまざまな文化的な活動や振る舞いを持続させることも、人間のおこなうべきことだと思うのです。青山先生とは、そのための知や技（わざ）はどういうふうに見つけられるのかについてもよくお話ししています。今日のオンラインを通じた共同的な試み—研究ということではないのかもしれない、集まって話す、報告し合うという実践もまた、文化的サバイバルの方法を発見する旅の一部なのかなと思いながらお話を伺っていました。

青山先生には、私から事前に簡単な質問を三つ準備させていただきました。それぞれ旅について、庭について、ホームについてです。

旅する参加者の変容

まずは、旅について。青山先生の今回の研究会はまさに旅ですが、終わりも示されていませんし、どこまでも続くのかもしれませんが。つまりオープンエンドの旅であって、ゴール地点が準備された旅ではありません。こういった予定調和ではないものを志向する旅で一番楽しみなもの、期待できるものは、旅人自身の変容だと思います。別の言い方をすると、私たちが慣れ親しんだ計画性からあえて逸脱していくような物事との関わり方を続けていくということですよ。

ここから質問です。この研究会はまだ短い期間でのチャレンジですが、三人の若い参加者あるいは青山先生ご自身にこの旅の中で生じた変化があれば教えてくださいませんか？

○青山 先生、ご質問ありがとうございます。あまり予定調和的にやりとりしないということで、ちょっと答えには戸惑っております。

若い参加者に生じた変容の兆しは、先ほどプレゼンテーションの中で申し上げたように、私にはまだ分かりません。ただ、私が願いのように考えていることは、

1 岸 (2022)

それぞれの参加者が新しい種を受け取るようなことがあったのではないかということです。いずれその種が、彼らのこの先の人生の中で、どのように花開くか分かりませんが、何らかのかたちで花開いてほしいと思います。

私自身についての変容の兆しですが、ひとつ言えることがあります。私は、もともとは経済学者として訓練を受けました。そのことが意味するのは、どちらかといえば、地域のコンテキストからコンテキストフリーで思考するように訓練されてきたということです。要するに、ある理論がどのような地域でも通じることを前提として思考する訓練を受けたということです。

でも今は、私は地域研究者で、エリアスタディーズの専門家ということになります。にもかかわらず、どちらかといえば地域の歴史や政治のことを知らずにきてしまいました。言い訳になりますが、サマ・ディラウトという少数民族の調査を、その集落に籠もってやってきたということがあると思います。ですが、今回の参加者との交流を通じて、ミンダナオで暮らす、ダバオで暮らすリアルな人間としての他者と交流ができた。そのことを通じて、私の中に新しい回路が開きました。その回路を通じて、これまでとは違ってもう少し地域の文脈を知る、より地域研究者らしくなるというような方向性を自分の中に見つけられたと思います。

○岸 ありがとうございます、面白いですね。パンデミック禍でどんどんあらゆるものが閉じていく、籠もっていくということが、ある意味で強制されていますが、青山先生の今のお話を伺うと、むしろ開かれていくという動きが出てきているのがとても興味深いです。先ほど触れた「これから生きていくための技法」についての大きなヒントを見つけることができるように感じました。

もうひとつ、ご回答をいただいて今気づいた点があります。コンテキストフリーという言葉が出てきましたが、パンデミックという人類共通の災難が現れた今から先にも、様々な次なるコンテキストフリーの悩みや困難と私たちは向き合わなくてはならないのではないかという気がするのです。あるいはすでに私たちは別種のコンテキストフリーの問題と対峙しているのかも知れません。私たちの行動様式や、都市や居住空間の設けられ方もその一つなのかもしれません。先生のご研究は、それに対してどうやって抗していくのかを考えていく手掛かりにもなってくるのではないかと思います。

自ら育つ庭

次に、庭についての質問です。先ほども申し上げましたように、庭と旅は、実

は同じようなことを言い表す言葉のように思います。この研究会を、旅という視点から理解することができるように、庭の在り方や概念からも見るができる。四名の参加者それぞれが構成要素としてひとつの庭を作り上げていこうとするプロセスの中にあるという図式として見るができると思います。

さて、一般的に庭というと、器としての庭があって、そこに所有者が何かを入れたり、庭師が手入れしたりしていくものですが、この研究会には外部からコントロールする主体はありません。

質問はここからなのですが、このような構成要素だけで育っていく庭がどのように可能になるのか、お聞かせいただけますか？ 呼び掛け人である青山先生がある程度は庭の姿をハンドリングしていたのだと想像しますが、青山先生が期待されていることも、やはり予定調和ではありませんよね。そこには様々な遊びがあり、想像していなかった展開になることも大いに期待されていると思います。そのあたりについても考えられていることがありましたらぜひ教えてください。

○青山 少し難しいと感じていますが、まず二つめの点からお答えしたいと思います。発表スライドに私は庭師だと書いたのですが、実は私は、全体を俯瞰したり、細部の機微を捉えたりすることが苦手です。プロジェクトを始める時点から無意識にそのことを知っていて、そのためにドクター・ネリー (Dr. Nelly Limbadan) にコンサルタントをお願いしたのだと思います。それがひとつの答えです。

もうひとつの答えは、庭のイメージについてです。スライドには日本の庭を出してしまいましたが、私が質問されて思い浮かんでいるのは、あまり持続性のない儂い庭。というのは、東南アジア島嶼部の社会についてよく言われる、流動性が高いということと関係があります。つまり、ある場所に村ができて、そこから住民がスピニアウトして別の村をつくっていくというかたちで、ネットワークのような全体をつくっていくというイメージです。

それで思い出したのですが、今回の研究会の構成要素、つまり参加者のなかにアーティストのカルロ (Karlo Antonio Galay David) がいます。あるとき、彼がクリエイティブ・ライティングのワークショップでネグロス島にあるシリマン大学 (Silliman University) に行ったときのことを話してくれました。彼はそこに咲いていた蘭の花をミンダナオ島のキダパワン (カルロの故郷) に持ち帰ってきたのです。彼はミンダナオからネグロスに旅をし、その大学で作家としてのワークショップに参加して、自らが書くと同時にメンターの作家たちやほかの参加者たちと対話をするなど一定の時間を共にすごして、つまりその場所を共に耕

す経験をしたわけです。その場所にあつて彼は、いわばその庭の構成要素（ワークショップの参加者）だったわけですが、そこから花を持って帰って、別の場所、この場合は、故郷に植えて育てるようになりました。そして、その時間の経過のなかで、今度は自分自身が作家や教師として場所をつくり、耕していったわけです。つまり、自分自身が庭師になっていくということが起きていたのだと思うのです。

繰り返しになりますが、ここでは、そういう庭の構成要素そのものがスピニアウトして庭師になるようなとても流動的な庭をイメージしています。

○岸 ありがとうございます。全体を俯瞰したり、細部の機微を捉えたりすることが苦手であることが、実はとても重要なアドバンテージだったのだと思います。全体を計画できない、しようしないということが。

構成要素がスピニアウトして、次なるガーデンを作っていくというイメージも、とても面白いと思いました。もしかするとそれはやがては一人で自分の道を歩く人を育てる（カルティベートする）「教育」の初原的な形のように思います。今回の研究会は青山先生と若い三人という構図ですが、一方向的な関係で教育が施される現場であるというふうには見てはいけないのではないかと思います。自律的、自発的に構成要素たちが干渉・応答し合いながら—相互作用という言葉も使われていましたが、各人が外にスピニアウトする機会を見つけ出していく。そういう我々があまり経験したことがないような場—教育と言えいいのか、学校と言えいいのかまだ私には分からないのですが—がつくられるひとつのヒントがあるのかなとも思います。

「ホーム」とは

では三つめ、ホームについての質問です。私のバックグラウンドは建築計画学なのですが、大学の建築デザイン教育で住宅設計の課題を指導するなかで、ホームとハウスの違いについて議論をすることがしばしばあります。ハウスはわりと定義が簡単です。物質的ですし、居住のための具体的な空間で、日本語では家屋です。売り買いできるようなものでもあります。

ですが、ホームはもう少し難しく、幅広くさまざまな定義ができるものです。例えば、回帰・帰還できる場所、自らが守られる場所、また自分がそこに拠って立つことのできるベースのような場所とも考えられますね。あるいは、信頼を置ける場所として考えてみると、ホームは、記憶、歴史、信仰などのなかにも存在できると思います。

少し違う見方をすると、例えば、ホームレスという言葉がありますよね。家がない人ということならハウスレスでいいはずですが、そうではなくホームレスといます。このことのなかに、もしかするとホームの本質が、見つけられるのではないかとも思います。

ここから質問になりますが、ホームという感覚や、自分にとってのホームは、当然、自分の中で育まれていくものですよね。非常に個人的な質問になるかもしれませんが、今回の青山先生の調査地がホームとして位置づけられたと自覚されたのは、長年の活動の過程のどのような段階だったのでしょうか？

○青山 ご質問ありがとうございます。どの時点でホームと感じたかをお答えすることは難しいのですが、確実に言えることは、私がホームを考える場合に、ある一定の時間をすごしたという時間性と記憶が大事だということです。ただ、先ほどハウスの話が出ましたが、物質的、物理的な場所もホームを心の中で育てるうえでは大事だと感じています。

具体的な場所では、すでにお話ししたサマ人の集落、サマのひとつの村です。それから実はアテネオ・デ・ダバオ大学の特に礼拝堂、それからダバオ市の親友の家です。その三か所が私のホームの感覚の支えになっていると思います。

そこで共通している私が持つ感覚というのは、私の主観ですが、無条件に受け入れられているように感じるということです。そして、私自身の中にも、その人々、さまざまな事柄や物に対して、無条件の愛があると感じられるということがあります。日常的に考えているわけではありませんが、それは私がカトリックであるということとも何か通じるものがあるのかなと思います。サマ人の人たちは、カトリックではないのですがキリスト教徒になっています。それから、アテネオ大学はイエズス会です。親友もカトリックなので、キリスト教というもので何かつながっている部分が、もしかしたらあるかもしれません。

○岸 ありがとうございます。一つひとつ丁寧に答えいただきありがとうございました。ご質問もたくさん寄せられておりますので、他にもいくつかお答えいただきたいと思います。

質問1

旅、庭、ホームなどの言葉を一元的に定義せず、やりとりをするなかで(理解を)深めていくという手法が成り立っているのは、少数民族の地域性の文脈を理解していることが背景にあるのでしょうか？言葉に表れない部分に対する理解や、時

間の経過による理解の深まりは、より純粋にやりとりのみによっているのか、どのように思われますか？

○青山 ご質問が少し私にも難しいのですが、やりとりをするなかで深めていく、定義がどちらかという後づけになるというのは、確かに私の研究手法の特徴でもあります。先ほど私は、経済学者として訓練を受けたと言いましたが、研究者としてのデビューは、実は人類学者です。訓練もなくなぜ人類学者としてデビューしたかといいますと、研究方法がまず現場に行くということで、これは身体性を伴います。現場（フィールド）に行くと、そこでは必ず身体が巻き込まれ、体がインボルブされるという感覚があります。つまり、まず経験から始めるので、身体性が先で言葉は後から来ます。

ですから、少数民族の地域性の文脈を理解しているというよりも、少数民族についての調査の経験の延長に、今回のプロジェクトのやり方もあったと思います。

○岸 ありがとうございます。次の質問も身体性に少し関わるお話ですね。もしかしたら、これが最後のご質問になってしまうかもしれません。

質問2

オンライン交流の場は、身体が存在空間を共有せずに、時間やコミュニケーションを共有するという特徴があると思いますが、この観点からのプロセスを通じた示唆を伺いたいです。

○青山 これは、岸さんにもお伺いしたいと思いますが、まず私から回答します。今回のプロジェクトの場合は、私がダバオに数年暮らしていたというベースがありまして、ある程度、参加者が暮らしている場所を具体的に想像することができました。もし、全く行ったことがない場所の人たちと同様のプロジェクトをされると、私にとっては、より難しかったと思います。

岸さんは、必ずしも行ったことのない場所や、参加者が知らない場所にいるプロジェクトをなさっていますので、もし何か今の質問に対してヒントがあったらお話しいただけますか？

○岸 昨年、一年間かけてオンラインでのワークショップを行いました。日本各地から参加されている方々と、私が現在ホームにしている秋田の地域を学び、また、さまざまな地域から参加する方々が、ご自身のホームとしての地域を紹介し

合い学んでいく「地域考」のプロジェクト²です。そのときに、二つのことを心掛けていて、それがうまくいった部分もありました。

一つは、単純なことですが、徹底的に対話や交流に時間をかけることです。とにかく可能な限りじっくり話をする。オンラインであっても、今日のセッションのように対話の機会を多く設けるということです。パンデミックが始まってまだ一年くらいの頃でしたが、そのなかで一科学的に証明できるか分かりませんが一ディスプレイを通じて話をするときに画面で起きていることを読み込み理解する力が、私たちのなかに育ってくるのではないかと直感しました。あるいはカメラの前での振る舞い方、たとえばジェスチャー、表情や声色、そして言葉の運用の仕方、これから新しく開拓していけるのではないかなど。単なるテレビ電話としてではなく、視聴覚のインターフェイスを上手に使っていく潜在的な可能性がたくさんあると思ったので、表情の機微を見たり、言葉遣いを確認し合ったりすることを通して、お互いをよく知ることを基本にしていました。

そのことと矛盾するようですが、二つめは、言葉に頼り過ぎずに、さまざまなメディアで伝えたいことを報告するということです。例えば、ドローイングでもいいですし、何か外で拾ってきたものや写真を見せ合ったり、一緒に同じレシピで料理をして食事会をしたり、録音した現地のサウンドを紹介するのでもいいでしょう。オンラインの画面上ではあるけれど、従来のような言葉による説明だけではないやり方でそれぞれの現場を報告し合い、想像を通して理解を試みる。よく分からないときにこそ、言葉で説明を受ける。想像力をフルに稼働させないと相手の伝えたいことを知ることができないという視聴覚メディアの制約を、不自由ではありますが、あえて私たち自身に課していたということです。

とはいえ、私自身もこれまでに「リアル」ではいろいろなやり方や経験を積んできてしまった世代の人間なので、やはり物質を伴わないオンラインでは実際の現場での経験にはかなわないのではないかという疑いを持ち続けていますが、それでも現地に行くのとは違う種類のリアリティの経験の仕方を見つけられるのではないかと、いつも考えています。

今日の青山先生のご報告を、私も自分の活動の参考にさせていただきたいと思っています。

○青山 岸さん、ありがとうございます。時間の都合ですべてのご質問に答えられず、本当に申し訳ございません。本日まで参加いただいた皆さま、フィリピン

² 秋田公立美術大学が2021～22年に実施した「複合芸術ピクニック 秋田／沖縄 ふたつの創造的辺境をむすぶ地域考」プロジェクト。https://akibi-picnic.jp/akita-okinawa2021

からの皆さま、通訳の辻井さん、樫山さん、司会の祝さん、本当にありがとうございました。本日はどうもありがとうございました。

引用文献（第一部）

日本語

オースター、ポール著. 柴田元幸訳. 2007 (1994) .「ゴサム・ハンドブック」『トゥールーストーリーズ』新潮社.

岸健太. 2022. 「未来都市の難民たち—カンボンの『生存の知技』とこれからの私たち」『東洋文化』102: 3-40.

日下渉. 2013. 『反市民の政治学—フィリピンの民主主義と道徳』法政大学出版局.

張政遠. 2020. 「『結び』のことば」宇野瑞木・高山花子編著. 『石牟礼道子を読む—世界をひらく／漂浪く』東京大学東アジア藝文書院. 155-156.

英語

Aoyama, Waka. 2020. *An Intimate Journey: Finding Myself Amongst the Sama-Bajau*. Kyoto University Press + Trans Pacific Press.

Go, Beng-Lan ed. 2011. *Dicentring and Diversifying Southeast Asian Studies: Perspectives from the Region*. Iseas-Yusof Ishak Institute.

Go, Beng-Lan. 2020. “Inter-Asia as Method and Radial Politics.” In the *Oxford Handbook of Comparative Political Theory*. Ed. by Leigh K. Jenco et al. Oxford University Press. 1-25.

<https://www.oxfordhandbooks.com/view/10.1093/oxfordhb/9780190253752.001.0001/oxfordhb-9780190253752-e-22> (December 22, 2022)